

Superstring Secrets 加藤翼

「慰安婦」「天皇」といったトピックが強烈なアレルギー反応を起こすさまを目の当たりにさせられた昨年8-10月の国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2019」。一部の展示が見れなくなるという騒動から始まり、結果的に一週間だけ展示が再開され、トリエンナーレの閉幕を迎えるまで、複数のアーティストたちとオルタナティブ・スペース「サナトリウム」を立ち上げて「平和の少女像」の作家キム・ウンソン&キム・ソギョンや河村たかし名古屋市長といったゲストを迎えてのレクチャー、座談会、対談を企画した。それ以来、社会のなかである種タブー化されたNGワードといわゆる社会（市民）の分断との関係について着目している。

一方で、昨年11月からはMOCA台北での展覧会のために台北に滞在しはじめ、それはちょうど香港の区議会選挙の最中だった。海を隔てながらも香港プロテストの動向を注視し、香港の民主派候補たちを支援する台北の若者たちと触れあい、年が明けた2月からは香港の大館當代美術館での展覧会のために香港滞在をはじめたが、それは台湾の総統選の翌月のことであり、その結果に少なからず勇気づけられる香港の若者たちの姿に台湾と香港の距離の近さを実感した。

あるトピックをめぐる市民の分断も、台湾と香港の若者たちの結束も、それらを触発するのは言わずもがなソーシャルメディアであり、それは匿名で敵を攻撃しあう戦場となる一方で、国境を超えた団結を演出するプラットフォームにもなっている。苛烈な民主化デモが繰り返されている香港にそうした両面性を持つ場が現実としてどのように表現されうるのか、と街を探索し、街の地下に張り巡らされている歩行者トンネルで足を止めた。そこには次回のデモのステートメントや集合場所、日付を掲示するプロテスターたちがいれば、反対にそれらの情報を黒塗りにして隠そうとする者たちもいた。興味深いことに、そうした情報はソーシャルメディアで既に共有されているとしても、地下トンネルという公共空間で物質としても共有しなおされ、その情報更新と消去のイタチごっこの痕跡は今もなお壁に残されているのだ。なぜ情報はインターネット空間から現実空間へとわざわざ移送さなければならなかったのか？その疑問自体の発見が今回のプロジェクトの基軸となり、香港で活動するアーティスト、哲学者、学生たちの協力のもと、地下トンネルでのパフォーマンスを撮影した。

今回のプロジェクト・シリーズは香港の後、シンガポールと台北でも計画されていたがパンデミックの影響で両方とも延期されてしまった。仕方なしに5月に帰国し、代わりにパンデミック下の東京のリサーチを始めたとき、クルド人の人たちと出会うことができた。パンデミックによって渡航制限や外出自粛のような移動制限が私たちに課される以前に、例えば難民申請中で出入国在留管理庁の入国者収容所から仮放免の状態下にある人たちは、許可がなければ自由に都外・県外に出ることをそもそも禁止されている。隣の県に住む家族や友人とその県境の川に架かる橋でしか落ち合えないという現状がこの日本で繰り返されていることすら、恥ずかしながら僕は知らなかった。「常に私たちは自粛することを強いられてきた」と語ってくれた男性にこのプロジェクトに協力してもらうため、品川の入国管理局と一緒に彼の外出許可を申請したが、パンデミック下であることを理由にその許可はおりなかった。秘密裏に建設解体業を営む多くのクルド人の人たちがオリンピックによる東京の解体ラッシュの立役者であることは、間違いはない。

誰しものが何かしらかの秘密を個人としてだけでなく、家族でも、会社でも、国家単位でも（たとえそれが公然の秘密だとしても）抱え、例えばインターネットの掲示板、心療カウンセラーとのインタビュー、モスクや教会での懺悔、選挙投票などの機会において、匿名性が守られつつ私たちは内なる思いを吐き出すことができる。秘密は、私たちがどのような日常を過ごしているのか、私たちを取り巻く環境がどのような場所なのかに密接的に関わり、それ故に私たちの物語を紐解くことができる鍵である。このインスタレーションの特徴は、秘密を集める時代や場所を変えながらその内容がアップデートされていく点にある。現に、この個展と同時期に開催する韓国・光州のACC（アジア・カルチャー・センター）での展覧会においても秘密を集め、そのインスタレーションで流れる映像を東京から遠隔で更新していく（展覧会場には、書かれた秘密を自動で撮影しGoogleドライブにアップロードするカメラが設置され、そのデータを東京で受け取り、更新した映像を光州に逐一送っていく）。このプロジェクトが今の東アジアだけでなく、やがて世界各地に展開し、時代を超えて私たちの秘密を紡いでいく風景を想像してもらいたい。

2020年 加藤翼

音響：Sous Chef

撮影：青石太郎

翻訳：Ryan Holmberg、Tinshui Yeung

システム設計：時里充

DMデザイン：吉岡秀典

制作：平野由香里

協力：Ali Ayyildiz、C&G Artpartment、木村泰平、坂倉圭一、毒山凡太郎

助成：小笠原敏晶記念財団

加藤翼展プレスリリース

